
3つの言葉「永遠に待ってて」@小野チカ

小野チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3つの言葉「永遠に待ってて」@小野チカ

【Nコード】

N3183W

【作者名】

小野チカ

【あらすじ】

アラサーなのに魔女っ子選抜に受かった！？キラキラス
テッキを片手に答えは決まっている。私は……。

「本気ですか……」

「我々は至って本気だ」

そう言われて自分の手の中に収まっているステッキを見る。誰だよこれつくったの。これに呪文を唱えると光の刃が出て来ますとか言ってたけど、鞘に装飾しすぎ。百円均一で売っている“お姫様セツト”とかについていそうなたらってらの宝石が所狭しとくっついている。シンプリーズザベストという言葉を知らんのか。そうか。投げていいか。

っていうか、デコステッキはどうでもいい。

なんで私、二十八歳という齡で魔女っ子選抜に受かったちゃってんの？

ことの始まりは昼食時だった。

いつも通り会社の近くに売りにくる、安さとボリュームが売りだという三百五十円という破格の弁当を買って、公園で食し、缶コーヒーと煙草を片手に空を見上げた時だった。

子どもの頃からUFOと言えばこれ、という形をした浮遊物がうるうるしていて、ああ私またパソコンの画面凝視してたのかしら、疲れ目だわー、なんて思っていた。

特に二度見をすることなく煙草を吸って長く吐く。

やめなきゃなあ、と思いつつ煙草を吸った時の脳がぼーっとする感覚がやめられない。その時間だけは、上司のお小言もクライアントの我が儘も、上手く行かないスケジュールも忘れられるからだ。営業からの愚痴も、他の班長からのヘルプもちやぶ台に全部のつけて投げたい。なんで自分のところで処理できないのを私に言うのだ。自分で計画たてろ、計画！！

休憩時間終了まで十分程になった時、煙草の火を消して立ち上がった。それと同時に光につつまれて、気がつけばUFOの中でした、という経緯だ。

まあ、なんとかかんとか؟؟名前長過ぎて覚えられない???っていう人間に化けた怪物が侵略を企てていて、なんたらステッキ??名前を覚える気がない??だけが唯一その人間に化けた怪物を退治できて、その適合者として反応したのが私らしい。

オフィス群のなかにぽつりとある、綺麗に舗装されたこの公園は晴れの日はとても賑わっている。昼食時には若い女の子たちがきやあきやあ言いながら芝のところで慎ましやかな大きさのお弁当を広げてたむろっているのが常だ。

おいステッキのやつ、選び間違いにも程があるだろー！

こちとら酸いも甘いも男も世も知っちゃったアラサーなんだよ！

「っていうか無理。締め切り近いし」

「いつまで待てば良い？」

「永遠に待ってて」

紙と鉛筆でかけそうな顔をした中華髭を二メートルくらい伸ばしたやつが、なんたらステッキの生まれた国の王様だか魔術師だか、あれ。なんだつけ、とりあえず偉い人らしい。重力にさからってまるで触覚のように持ち上がっているその様は、人間に化けている怪物より立派な怪物だ。あんたを怪物と言わずに、誰を怪物と言えよう。不気味で気持ち悪い。

「……強情なところが良い！　なあ、皆の衆！！」

そう言っただけで中華ヒゲは周りで飛び跳ねる丸い球体に問いかけると、
「そうだと言わなければかりに跳ねた。何が皆の衆だ。あんたら全員科学
研究員かなにか捕まっただけで検査してもらえ。」

「で、このままだと立派な拉致監禁なので帰して欲しいんだけど」

「なっ！　我々は正義の味方だ」

「なーにが正義の味方よ、馬鹿馬鹿しい」

そう。このステッキを使ってこっぴどい呪文を唱え、相手を倒して何になるか。地球を滅亡から救ってくれるのかと思いきや、この中華ヒゲの国が侵略から免れるだけなのだ。地球全然関係ないし！！　侵略されているのは中華ヒゲのお国で、敵は地球を拠点に行動しているだけらしい。なにこの果てしないとばっちり感。っていうか休みが終る。

「休みが終るので帰して下さい」

「駄目」

「か・え・せ・これ抜くぞ」

「駄目だ。これはワシの本体だ、気安く触らないで。いいと言ってくれるまでは駄目！」

どこのだだっこだこのヒゲジイ！！　っていうか本体こっちかよ！　私の締め切りは見たことも聞いたこともないヒゲの国より身近な危機だわ！

「いいわ、自分で帰るし」

そう言っつてUFOへと迎え入れられた時の入り口のハッチを開ける。透明になれるらしいUFOは、泣く子も黙る高さ……などではなく、普通に地上から一メートル程度を低空飛行していた。

私が科学者とかなら透明になれる原理とか、人一人とヒゲと丸いのを運びつつ周りに影響を与えない飛行の仕組みの研究とか、ものすごくそるところがあるのだろうけれど、残念私はしがたい会社員なので何とも思わない。後ろ髪ひかれるどころか早く帰って仕事を上げたい。

「じゃ！」

「ま、待て！　怪人はどうする！！　我が国の未来は！？」

「自分の国ぐらい自分達でどうにかしやがれって言ってるのよ。なんで拠点にしてるだけの地球で私が魔女っ子しなきゃなんないのよ。そんなことするより、あんたが相手の親玉の所行って寝首でもなんでもかききればいいんじゃない？　全く人様に迷惑かけてんじ

やないわよ」

ぎゃあぎゃあ言う中華ヒゲの言葉は途中で嚙んだのか、いだひいだひと繰り返されるだけで何を言っているのかわからない。っていうか、舌あつたんだ。ふーん。

「どうでもいいや、帰って仕事しよ」

あーやっぱり疲れてるわあ、と言いながら会社への道をだらだらと歩いた。

「本気ですか」

「まあね」

そう言つて喫煙所で煙を吐いた男は我が社の五イケメンズのうちの一人だ。背が高く、ハーフだと言う両親から惜しげもなくイケメン遺伝子が配合された整った顔の持ち主だ。同期入社ということでも部署違いのこの男と喫煙所であれば、挨拶や他愛もない話のひとつやふたつは交わす仲だ。

好きなときに休憩を取つて良いフリーダムな我が社には喫煙所が一つしかない。大抵誰かがいるのだけれど、今日はたまたま私とその男だけだった。

私を見るなり匂うと言った失礼なこの男はさらりと爆弾を投下した。

「ヒゲジャマイカ閣下と接触したね？」

白い歯をこれでもかと見せつけながら五イケメンの一人が言う。
何それ。芸人？

「こういう特徴があるのだけれど」

そう言ってスーツの内側からメモを出し、さらさらと描かれた人物には見覚えがあった。むしろそいつしか覚えがなかった。中華ヒゲだ。

「ああ、知り合い？」

「まさか！ 彼は我々の友好的侵略を阻む悪の組織の頂点だ」

真面目な顔して言い切った男をこいつも疲れてんなあ、と思いいながら見る。

っていうか、侵略に友好もくそもあんの？

お互い悪って言ってるあたり、おつかれーすつと言って逃げた。面倒くさい。

「……まさかとは思うけれど、キラリン・トゥナイト・タクティスに選ばれたとか」

なんだその名前。キラキラしすぎだろ。

「なにそれ」

「こういつやつだ」

そう言つて男が描いたのはデコステッキだった。あー痛い。イケメンだけにこの脳みそ楽しい感じが痛い。

「デコステッキね、そういう名前なの」

「引き受けてないよな!？」

がつつりと前のめりで聞いてくる男に私は今日めんどくせえ、とごちた。その上、目をきらきらさせながら男が私の手を取るもんだから上手い煙草も不味くなる。

その上、あらぬことを提案されたのだ。

「あれに選ばれたのだったらあなたは間違いなく戦力になる。どうだい、僕たちと一緒に戦わないか？」

で、本気ですか、まあねに繋がるのだ。

勘弁してくれ。何今日、厄日？

「ごめん、あなたのことは目の保養とってたし、営業成績もまあまあだから特別変な目で見たことはなかったけど、今日から無理」

「いつまで待てば良い？」

「地球が滅亡するまで」

「なん……だ……と？」

「じゃ、私仕事あるから。おさきー」

そう言つて灰皿に煙草を落とすと缶コーヒーを飲み干して喫煙所を出た。

「ああもうみんな疲れて頭湧いてんだなあ。今日は早めに切り上げて飲みにいくか」

根詰めて作業している自分の班の後輩を思つて、階段を上った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3183w/>

3つの言葉「永遠に待ってて」@小野チカ

2011年9月3日12時12分発行